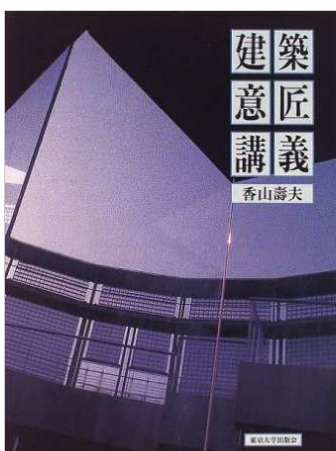


「建築意匠講義」 香山壽夫



内容目次

- 第1回 空間について
- 第2回 部屋について
- 第3回 部屋の集合について
- 第4回 窓について
- 第5回 続 窓について
- 第6回 入口について
- 第7回 場所について
- 第8回 表象について
- 第9回 モティフについて
- 第10回 意匠について
- 第11回 分解について
- 第12回 秩序について

◆この本は「建築意匠」の参考書・教科書です。東京大学工学部建築学科における「建築意匠」の講義をまとめたものです。

あとがきには、すべての人々に、建築を知ることの面白さ、建築を正しく理解することの大切さを知ってもらうことを願って書いたものである、とあります。また、香山さんは、ルイス・I・カーンに師事し、ロバート・ヴェンチャーリの「建築意匠論」に感銘を受けて、自らこの講義を始めています。

◆第1回講義より：建築は空間を秩序づけ、人は空間によって秩序づけられる。人は洞窟から出てきて建物をつくったのではない、建築は、言語とともに、人間が世界を認識するための道具だったと説明しています。建築は、他の芸術と比べて、人間の行為から心理までを実際的に制御する力を持っていて、日常の平凡な繰り返される行為から、非日常的な出来事、あるいは無意識にまで広く及びます。建築芸術は、現実の生活空間において、現実の生活空間として成立する芸術です。ここに建築の、面白さも、また困難さもあります。

◆第2回講義より：カーンは「形：フォーム」について、「私は古い制度の内に新しい表現を見出そうと努めています。たとえば学ぶための制度は、今日、私たちが大いに興味をもつものですが、それはおそらく一本の木の下のひとりの男、そしてその男のまわりにその人の言葉を聴く子供たちが集まる、ということから始まりました。私はその初源の感覚を願望しながら、問題に近づいていこうと考えます。」と学生に話をしました。

◆第4回講義より：ギリシア建築のように光と影の対比の効果のために決定されているものもあれば、光のために存在している光そのもののような空間もあります。後者である13世紀フランス・ゴシックの大聖堂の、その空間に身を置いたとき、将来自分が、どのような小さな仕事しか成し得ないにしても、この偉大な石工たちと同じ仕事を選んだことに喜びと誇りを感じたものです、と言っています。香山さんは「さいたま芸術劇場」のロトンダでギザギザなガラスで囲む光庭（光の造形）をつくっています。

◆第7回講義より：根津神社で、この辺を日和下駄をはいて散歩することを愛した永井荷風は「されば寺院神社の建築を美術として研究せんと欲するものは、単独にその建築を観るに先立って、広く境内の敷地全体の設計並びにその地勢から観察していかねばならぬ」と書いています。

◆第8回講義より：建築という芸術は、否定ではなく肯定を、悲しみよりは喜びを、不安よりは希望を、闇よりは光を表わすのにふさわしい芸術なのです。

◆第10回講義より：1436年から46年に、フィリッポ・ブルネルスキが、フィレンツェに建てた小さな礼拝堂、パツイ・チャペルは、いかに過去の伝統を取り入れ、かつ独創的な構造でそれを一つのものとして作りあげた、「支えのモティフ」と「囲いのモティフ」の一致が信じがたいほど見事に出現した建築です。

◆第12回講義より：ルイス・カーンは建築をつくる行為を次のような言葉に集約します。

「沈黙からの長い軌跡、沈黙へ向う長い道」

沈黙とは、静寂とは、常に次に続く行為、新たな出発が可能な状態のことです。騒がしさ、極端は、ものごとと概念を消費し、廃棄するにすぎません。沈黙とは本質へ向うことであり、そこから汲みとって、新しく生む力を持つことです。

(案内：黒野晶大)